

近代文学研究叢書

第五十二卷

昭和56年5月15日 印刷

昭和56年5月31日 発行

〔定価 5400円〕

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	東京都世田谷区太子堂一丁目 坂本由五郎
印刷所	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 大文堂印刷株式会社
発行所	東京都世田谷区太子堂一丁目 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座 東京四一七〇八六七 電話 (422) 五一三一・八番

近代文学研究叢書

第五十二卷

昭和女子大学

近代文学研究室

巖本善治 (1)

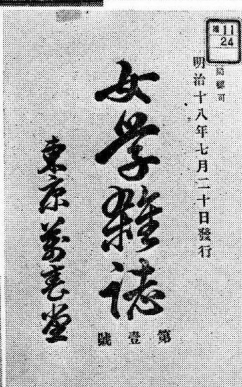
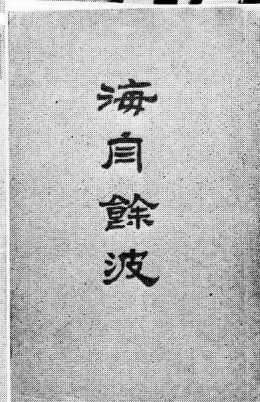
自筆 (巖本記念会蔵)

肖像 (巖本記念会蔵)

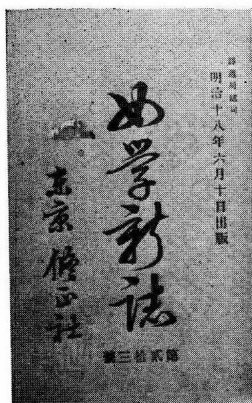


開拓雜誌 (昭和女子大学蔵)

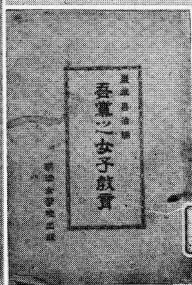
海舟餘波 (明治32年3月刊)
(昭和女子大学蔵)



女學雜誌創刊号
(明治18年7月)
(昭和女子大学蔵)



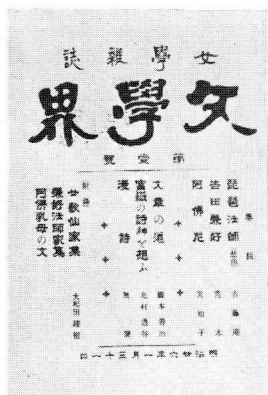
女學新誌 (昭和女子大学蔵)



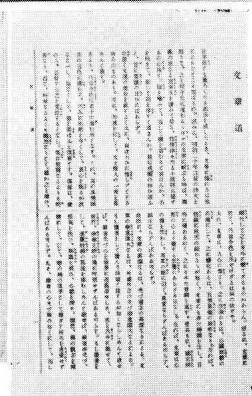
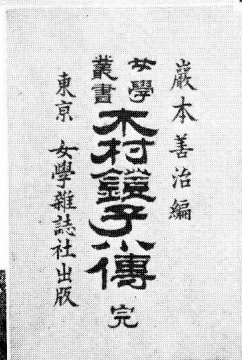
吾黨之女子教育 (明治25年刊)
(昭和女子大学蔵)

巖本善治 (2)

農業雑誌
文学界・創刊号（明治26年1月）
（昭和女子大学蔵）



文章道・文学界
（明治26年1月）
（昭和女子大学蔵）
木村鏡子小傳
（明治20年刊）
（巖本記念会蔵）



巖本家の墓（染井霊園）



善治（向って左）と賤子の墓（染井霊園）

岡 鬼太郎 (1)

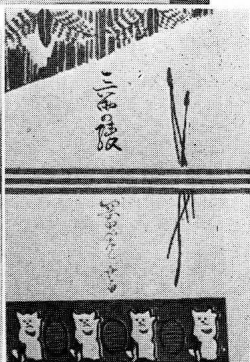
肖像



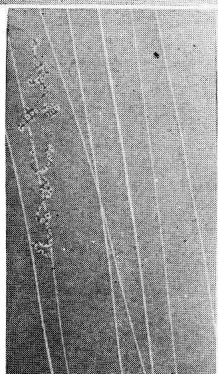
義太夫秘訣 (明治36年3月刊)
(岡畏三郎氏蔵)



三筋の綾 (明治40年1月刊)
(岡畏三郎氏蔵)



二筋道 (明治36年5月刊) (昭和女子大学蔵)
晝夜帯 (明治36年5月刊) (岡畏三郎氏蔵)



腹の皮 (明治36年9月刊)
もやひ傘 (明治40年10月刊)
(岡畏三郎氏蔵)



春色輪柳 (明治40年12月刊)
(岡畏三郎氏蔵)

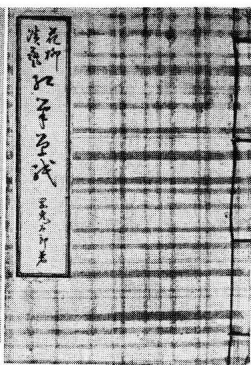
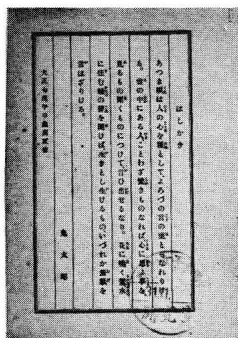
岡 鬼 太 郎 (2)

合三味線 (明治45年6月刊)
紅筆草紙 (大正2年1月刊)

(昭和女子大学蔵)

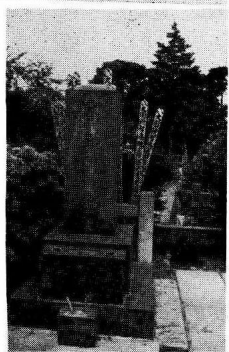
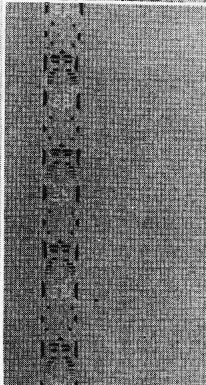
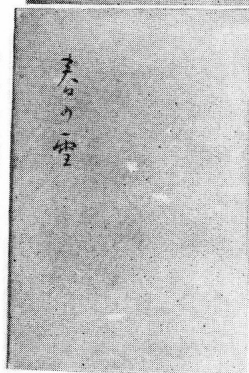
世話狂言集 (大正10年11月刊)
鬼言冗語 (昭和10年4月刊)

(岡畏三郎氏蔵)

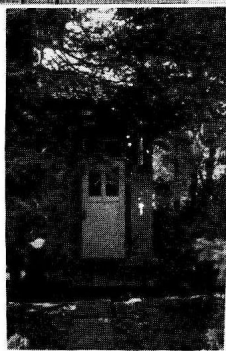


あつま唄 (大正7年4月刊)

(昭和女子大学蔵)



墓 (麻布長谷寺)



旧居 (大田区田園調布)



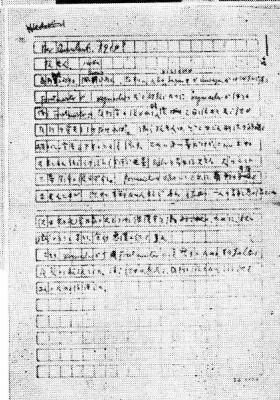
歌舞伎眼鏡 (昭和18年刊)
(昭和女子大学蔵)

山岸光宣 (1)

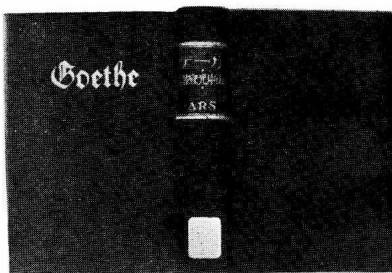
肖像 (山岸隆一氏蔵)



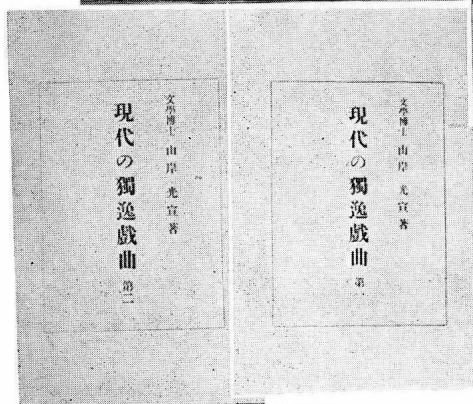
自筆原稿 (山岸隆一氏蔵)



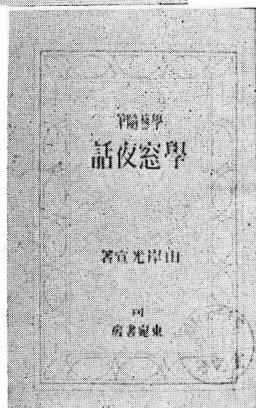
晩年を送った北沢の家



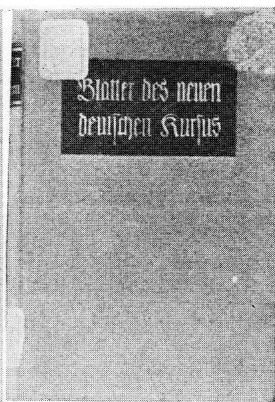
ゲーテ (大正15年5月刊)
(昭和女子大学蔵)



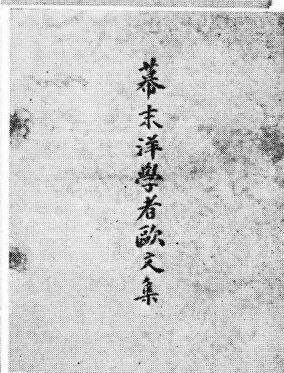
現代の獨逸戯曲 第一 (大正13年10月刊)
第二 (昭和2年6月刊)
(昭和女子大学蔵)



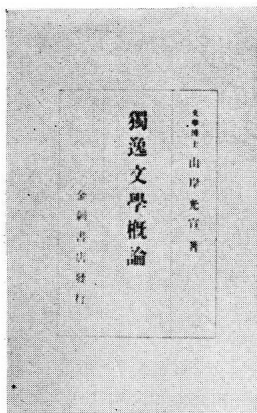
學窓夜話 (昭和12年1月刊)
(昭和女子大学蔵)



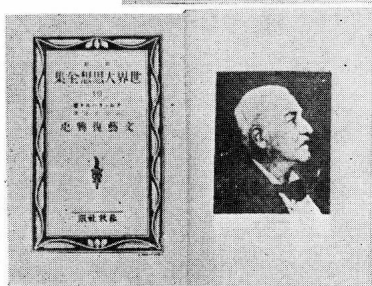
幕末洋學者歐文集
(昭和15年12月刊)
(昭和女子大学蔵)



藝術と藝術家 (大正11年11月刊)
(昭和女子大学蔵)



新ドイツ語講座第一卷 昭和4年9月刊
(昭和女子大学蔵)
獨逸文學概論 (昭和2年9月刊)
(昭和女子大学蔵)



文藝復興史 (昭和5年4月刊)
(昭和女子大学蔵)



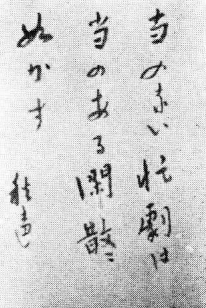
墓 (雑司ヶ谷霊園)

德田秋聲 (1)

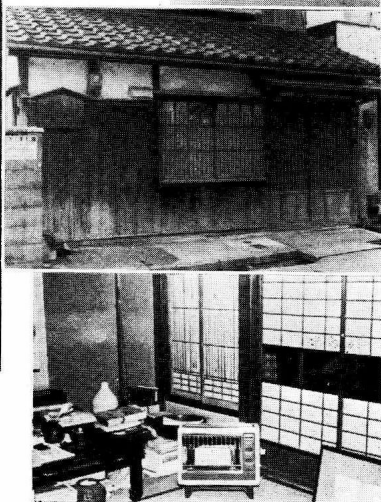
肖像



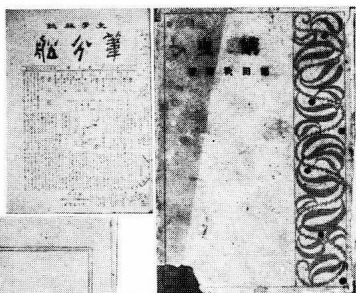
筆跡 (徳田一穂氏蔵)
秋聲集 (明治41年9月刊)
(昭和女子大学蔵)



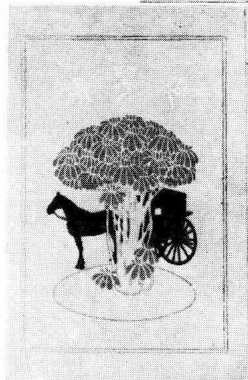
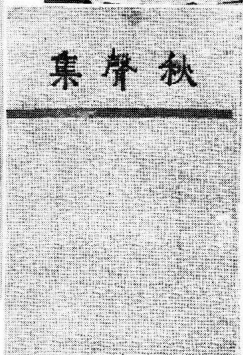
生家跡 (金沢市横山町)



秋聲書齋 (文京区本郷6-6-9)



講曳 (大正2年2月刊)
(昭和女子大学蔵)
春分船 (明治26年1月)
(明治文庫蔵)



少華族 (明治38年9月刊)
(昭和女子大学蔵)



出產 (明治42年4月刊)
草は蔓る (大正14年8月刊)



徳田秋聲 (2)

過くゆく日 (大正15年11月刊)

勲章 (昭和11年3月刊)

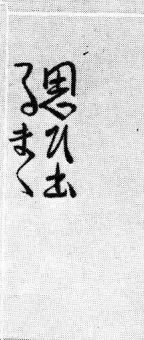
(昭和女子大学蔵)



思ひ出るまゝ (昭和11年4月刊)

縮圖 (昭和22年10月刊)

(昭和女子大学蔵)



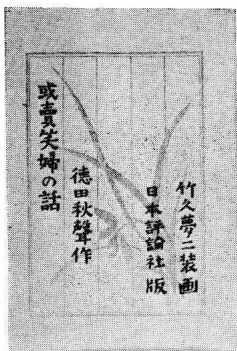
縮圖
著 徳田秋聲

小山書房



竹久夢二装画
日本評論社版

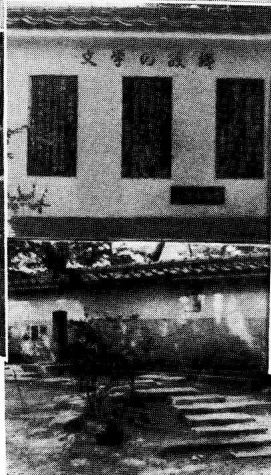
徳田秋聲作
或賣笑婦の話



一莖の花 (昭和16年9月刊)

(昭和女子大学蔵)

一莖の花
著 徳田秋聲



文学碑 (金沢市馬場小学校)

〃 (金沢市卯辰山)



墓 (谷中墓地)

或賣笑婦の話 (大正6年11月刊)

(昭和女子大学蔵)

假装人物 (昭和13年月刊)

老眼鏡 (昭和15年11月刊)

(昭和女子大学蔵)

兒 玉 花 外 (1)

肖像 (武田孟氏蔵)



兒玉家屋敷跡
(山口県長門市)

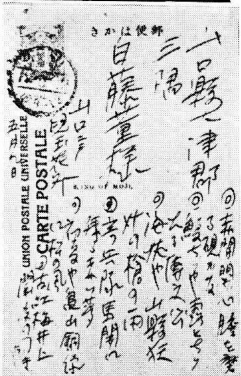
遺品
(渡辺信勝氏蔵)



筆跡 (白藤董氏蔵)

風月萬象 (明治32年6月刊)

(昭和女子大学蔵)



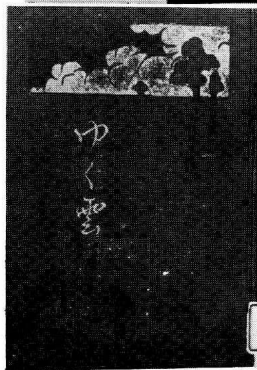
風月萬象
空

文學同友會出版

花外詩集
附同情錄

花外詩集 (明治37年2月刊)

(昭和女子大学蔵)



ゆく雲 (明治39年1月刊)
(昭和女子大学蔵)



日本男兒
作外花玉兒

日本男兒 (明治44年12月)
(昭和女子大学蔵)



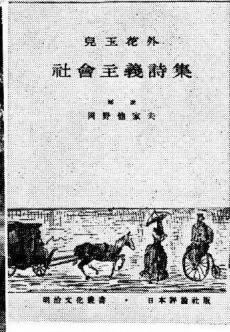
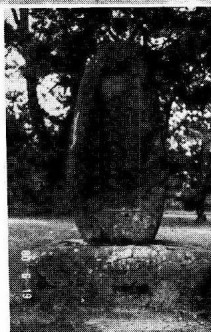
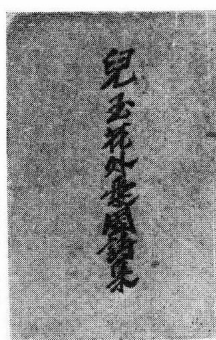
紅噴隨筆

紅噴隨筆
(明治45年1月刊)
(昭和女子大学蔵)

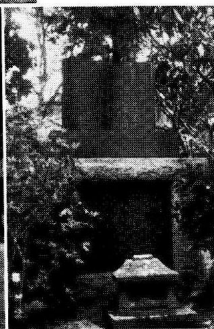
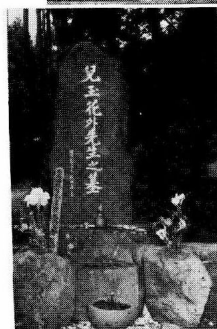
兒玉花外 (2)

哀花熱花 (明治45年5月刊)
 少年の歌 (大正11年4月刊)
 (昭和女子大学蔵)

兒玉花外詩集 (昭和18年7月刊)
 (昭和女子大学蔵)



社會主義詩集 (昭和24年11月刊)
 (昭和女子大学蔵)
 詩碑 (山口県指月公園)



墓 (山口県瑞雲山大寧寺)

墓 (静岡県大見山上行院)

詩碑 (山口県瑞雲山大寧寺)

目次

口 絵		(12)
第五十二卷の成立		(12)
凡 例		(10)
兒 玉 花 外		(11)
巖 本 善 治		(104)
岡 鬼 太 郎		(111)
山 岸 光 宣		(104)
徳 田 秋 聲		(117)
文 芸 年 表		(106)
PERSONALITY PROFILES.....		(111)
卷 末 付 記		(119)
第五十一卷年表補遺		(100)
索 引		(109)

第五十二卷の成立

本巻は昭和期第二十七巻として、昭和十八年九月から昭和十八年十一月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

児玉花外^{こだまかがい}は詩人。本名伝八。明治七年（一八七四）七月七日、父精斎、母絹枝の長男として京都で生まれた。父精斎は旧萩藩の家臣であった友人といざこざを起こし、妻子をのこして京都に出走、漢法医学を学んで医者を開業した。花外はこの富裕な環境で幼少期を過ごした。同志社予備校を経て仙台の東華学校、札幌農学校と転学ののち明治二十七年上京して東京専門学校（現早稲田大学）の文科に入学、坪内逍遙の薫陶を受け、中島孤島、中村吉蔵、近松秋江等上級下級に多くの知己を得たが、こども中退し、いずれの学校も修業年限を全うすることなく青春期を終った。三十年、京都に帰った彼は、内村鑑三の「東京独立雑誌」に詩作を発表しはじめた。処女詩集「風月萬象」（明32・6）は山田枯柳、山本露葉との合著で、続いて翌三十三年五月、河井醉茗、山本露葉との合同詩集「わか草」を刊行、十月には西川光次郎らと「東京評論」を創刊し、三十五年、大阪で「評論の評論」の記者となり作品を発表。この年与謝野鉄幹、岩野泡鳴、蒲原有明、河井醉茗他と「韻文朗読会」を創始した。翌年出版した『社會主義詩集』は思想上の問題で発禁となる。続いて上梓された『花外詩

集』には前著の発禁に同情をよせた「同情録」が付載されている。「文芸家」「新声」「直言」「白鳩」「中央公論」他多くの雑誌、新聞に詩文を載せ、三十八年以後約十年は彼の最も旺盛な文筆活動の時期である。詩文の他に史伝小説「源為朝」(明治43・II)の著もある。放浪の詩人花外はその住居も屢々転じ、稿料はすべて酒代に変わる生活の中から次々作品を生み、また社会主義同人雑誌「火鞭」の創刊にたずさわり、文芸誌「火柱」を編集した。著書は多く、詩の分野では晩年出版された『児玉花外詩集』(明治18・7)がその集大成をなしている。昭和十八年(一九四三)九月二十日、急性腸麻痺症のため死去、享年六十九であった。

巖本善治は社会思想家。文久三年(一八六三)六月十五日、但馬国出石町八木二番屋敷(現兵庫県出石町)に、出石藩士井上家六代藤兵衛長忠と母律の次男として生まれた。五歳の時、母方の叔父巖本範治の養子となり巖本の姓を継ぐ。明治九年上京、中村敬宇主宰の同人社に入社。英国自由主義思想の校風は彼に大きな影響を与えた。さらにまた、学農社農学校ではアメリカ的な実利主義を体得、ミルやスペンサー、ウェーランド、そして二宮尊徳などを愛読した。卒業と同時に「農業雑誌」の編集にたずさわり、小作制度の改善に一役をかった。明治十七年六月「女学新誌」を創刊、翌十八年七月新たに「女学雑誌」を創刊した。第二号から終刊に至るまで毎号執筆、筆名は月の舎しのぶ他十余種に及んだ。同年十月、本村熊二が東京九段に明治女学校を開校、善治は發起人として名を連ねた。後教頭に就任、経営上の実権を握るに至る。校長には二十五年に就任。フェリス和英学校の教師島田喜志子(若松賤子)を知り親交を深める。懐疑的人生観がこの時期を境に漸次明るい方